

● 第4回 東京国際ヴァイオリン コンクール

原 口 啓 太

今回はアジア勢がファイナリストを独占！

世界的ヴァイオリン奏者・今井信子の提唱により、ヴァイオリン音楽の祭典「ヴァイオラスペース」が誕生したのは1992年のこと。その一環として「東京国際ヴァイオリンコンクール」が創設されたのは2009年。3年に一度の開催で、コンクールの入賞者には、翌年以降の「ヴァイオラスペース」への出演が約束される。2018年にはその第4回が開催された。

83の国と地域から83名の応募があり、予備審査を経て32人のコンテスト参加者が参加した。会場は上野学園石橋メモリアルホール。審査委員長は今井信子、副審査委員長はアントワン・タメステイ、ハリオルフ・シュリヒティヒ、パメラ・フランク、野平一郎が審査にあたった。

5月26～27日の第1次審査。課題曲はシューベルトのアルペジオネソナタより第1楽章、ブリテンの無伴奏チェロ組曲(ヴァイオリン版編曲：今井信子)の以下の楽章より1曲：第1番第2楽章、同第4楽章、第2番第5楽章、第3番第5楽章、同第6楽章、同第7楽章、同第8楽章。第1次審査の通過者は8人だった。

続く29～30日の第2次審査の課題曲は、武満徹「ア・ストリング・アラウンド・オートム」(ヴァイオリン&ピアノ版)、J・S・バッハのフーガ(無伴奏ヴァイオリンソナタ第1番BWV1001のフーガのヴァイオリン編曲、暗譜必須)、コンクールの委嘱新作の野平一郎作曲「トランスフォルマシオンⅢ～J・S・バッハの5つの断片による～ヴァイオリンソロのための」(2018)、以下のシューマン作品より1曲：アダージョとアレグロ作品70、幻想小曲集作品73、3つのロマンス作品94、ヴァイオリンソナタ第1番より第1&2楽章、おとぎの絵本作品113。第2次審査を経て、4人のファイナリストが選出され、本選に臨んだ。

本選に残ったのは、すべてアジア勢だった。

セジュン・キム(韓国)は1988年生まれ、ベルリンのハンス・アイスラー大学でタバア・ツインマーマンに学び、2013年よりベルリン芸術大学でハルトムート・ローデに師事。ミュンヘンで室内楽をハリオルフ・シュリヒティヒとクリストフ・ポッペンに学んだ。さらに2015年よりハノーファーでフォルカー・ヤコブセンに師事している。ヤン・ロコフスキ国際コンクール優勝。アベル・クアルテットを2013年に結成し、ジュネーヴ国際コンクール第3位など、多数の入賞歴がある。

第2次審査以降唯一残った日本人、近衛剛大(たけひろ)は1997年オランダ・アムステルダム生まれ。日本のオーケストラの父ともいえる近衛秀麿が曾祖父、チェリストの水谷川優子は父のいとこという音楽一家の出身。完全な外国育ちで、日本語はあまり話せない。4歳から双子の姉と共にヴァイオリンを始め、13歳でヴァイオリンに転向。2015年クリスティーナ王女コンクール、2017年ナショナル・ヴァイオリン・コンクール(アムステル

ダム)で優勝。同年、ジュネーヴの小澤征爾スイス国際アカデミーに参加。2016年より生地で今井信子とフランシェン・シャットボーンに師事している。

残るふたりは共に中国人女性。ルオシヤ・ファンは1988年上海生まれ。8歳でヴァイオリンを始め、16歳で渡米、アイダ・カヴァフィアン、アーノルド・スタインハートに師事。さらにカーティス音楽院でシュミエル・シケナージにも学んだ。2016年よりマドリードで今井信子に師事しているが、ヴァイオリンも演奏する両刀使い。

ジーユー・シェンは1997年生まれ。上海音楽院で12歳からヴァイオリンを学ぶ。2013年15歳でライオネル・ターティス国際ヴァイオリンコンクールに最年少で優勝。2015年より、クロンベルク・アカデミーで今井信子に学んでいる。

6月1日、本選1はブラームスのソナタ(3曲から選択、ピアノは抽選で選ばれる)と無伴奏の現代曲(8曲から選択)。6月2日は全員が、ヒンデミット「白鳥を焼く男」を弾いた(伴奏は角田鋼亮指揮、新日本フィル)。

ヴァイオリンコンクールはヴァイオリンコンクールとは本質的に違う。今井の言葉を借りれば、「ヴァイオリン曲はヴァイオリン曲のように技巧や表現が前面に出て来ないから」、確かに各人の音色、表現、解釈、すなわち個性がより前面に出てくる。同じ曲を弾けば、なおさらその違いが際立つ。ただし、一般の聴衆は聴いていておもしろいが、順位の判定は難しい。

結果は、本選2終演後およそ1時間半のちに同じステージで発表された。第1位のルオシヤ・ファンは、表現の幅が一番広がった。同じようなフレーズでも決して同じに弾かない。千変万化する表現の《白鳥》は特に聴きものだった。第2位はふたり。韓国のキムはやはり年長者らしい安定感があり、その面ではファンに勝っていたと思う。音色も男性らしいヴォリュームがあった。シェンは清々しいフレッシュさがあり、その個性をさらに磨けばとても魅力的なヴァイオリストになると思う。

さて、4人からひとり入賞外という残念な結果になった近衛だが、今井もタメステイも言及したそのポテンシャルの高さは明らか。表現も20歳の男の子らしい大胆さがあり、まだそれを御しきれていない感があった。だが、3か月後のミュンヘンARD国際コンクール・ヴァイオリン部門第3位入賞と、見事にリベンジを果たしたことを付記しておく。